

龍樹造・中論無畏疏（前續）

寺本婉雅譯註

「觀縛解品」第十六 (Bandhana-mokṣa-parikṣā)

此に問て言く、根本無なれば、輪廻と涅槃と繫縛と解脱とは常に不合理なるが故に、諸行と衆生の輪廻と涅槃と繫縛と解脱とに成るべし。如何なる正理に由るも、諸行と衆生の輪廻と涅槃と繫縛と解脱とは認むべからずと教へらる、それをまた聞かんと欲す。此に釋して曰、

①「若し行は輪廻すといはば、

//Gar-Te hDu-Byed hKhor Shes-Na/

① 彼等は常に於て輪廻せず、

/De-Dag Rtag-Na Ni-hKhor-Te/

② 無常に於ても亦輪廻せず、

/Mi-Rtag-Na Yai hKhor-Mi-hGyur/

衆生に於ても亦此の次第は同じ」

//Sems-Can-Ia Yai Rim-hDi mTshuns//

「諸行往來者、」 「諸行が輪廻するならば、

//Samskārah saṁsaranti cen

常不應往來、

彼等は常なるも輪廻せず、

na nityāh saṁsanti te/

無常亦不應、

無常なるも亦輪廻せず、

Saṁsaranti ca na-anityāh

衆生亦復然」 衆生に於ても實に是れは同じ」

satve 'py eṣa samāḥ kramāḥ // (p. 280)

/Wenn die sanskritas wandern (sausarantū), dann wandern sie nicht als ewige,

Als nicht-ewig auch wandern sie nicht, beim satva auch ist gleiche Anwendung (karma) / (p. 85)

若し諸行は輪廻するを全く分別せば、彼等は常若は無常に(於て)輪廻すと計慮すとも、二者の如きはまた認むべからず。應に常に於て輪廻せず。何の故に云ふや。決定して住するが故に、自性(No-Bo-Nid)あるが故に、全く轉變(Gyur-ha)せざるが故なり。無常に於てまた轉變せず。何の故に云ふや、決定して住せざるが故に、自性空の故に、全く轉變の故なり。とはいへども衆生は輪廻すと思惟せば、衆生に於てまた次第は是れに等しと知るべきなり。

① 般若燈論「彼則無流轉、無常無流轉」

② 中觀釋論「常即無往來、無常無往來」

獨譯「彼等は然るとき常に於て轉廻せず、彼等は又無常にして、輪廻せず。」

此に問て曰、(P. 281) 衆生は蘊と處と界とに由るが故に、其者(自)と他と常と無常となりといはるゝことなくして輪廻すべし。此に釋して曰、

②「若し補特伽羅は輪廻すといはるゝ、

//Gal-Te Grain-Zag hKhor She-Na/

諸の蘊、處、界の中に於て、

それは五種によりて求むるに、

無なれば、誰が輪廻するや」

「若衆生往來、 若し補特伽羅が輪廻するならば

/Phni-Po Skye-mChed Khams Rnams-Ia/
/De-ni Rnam-pa I nas hTsal-Na/
/Med-Na Gai-Shig hKhor-bar-hGyur//
//Puḍgalah saṃsārati cet

陰、界、諸入中、 蘊、處、界の中に於て

skandha-āyatana-dhātūṃ/

五種求盡無、

五種に求めつゝ彼は

Pañcadhā mṛṣyamāno 'sau

誰有往來者」

無し、誰が輪廻するや」

nāsti kaḥ saṃsāriṣyati// (p. 280)

/Wenn (gesagt wird) : „Der puḍgala (Individuum) wandert“, so existiert er nicht in den

skandhas, āyatanas dhātus Fünffach gesucht : wer soll (da) wandern? / (p. 86)

若し補特伽羅が輪廻すと思惟せば、それは到底認むべからず。何の故に言ふや。何の故とならば、諸の蘊と處と界とに於て、彼は其者(自)なるか、彼等より他のものなるか、彼の中に其等は有るや、其等の中に彼ありや、其等を具するや否と五種に由て求むるに無なるが故なり。其れは無ならば、誰が輪廻するや。

又復

(3) 取⁽¹⁾取^(近)より取に、

//Ñe-bar-len-Nas Ñer-len-par/

輪廻せば有はなかるべし、

/ñKhor-na Srid-pa Med-par-ñGyur/

有なく、取なくば

/Srid-Med Ñe-bar-len Med-Na/

そは誰が何へ輪廻するや」

/De Gai Ci-Shig ñKhor-bar-ñGyur//

「若從身至身、」取より取へ、

//Upādānād upādānari

往來即無身、

輪廻しつゝそれは無となるべし

samsaram vibhavo bhavet/

若其無有身、

而して有なく取なし

Vibhavaḥ ca anupādānāḥ

則無有往來」

誰か何へ輪廻するや」

kañ sa kim samsariṣyati// (p. 284)

/Bein Wandern von Angenommenem (upādāna) zu upādāna wäre er ohne Existenz (vibhava);

Ohne Existenz und ohne upādāna: wer wird als solcher wandern? (p. 86)

若し補特伽羅は輪廻すと了解せば、そは取と共なるものか、若くは取なきものが輪廻すと計慮するとも、二者の如きはまた認むべからず。そこに應に取と共なるものは輪廻を認むべからず、何が故に云ふや。取より他の取に輪廻せば、その間に於て有 (bhāva, Srid-pa) は無となるが故なり。取無きものもまた輪廻せず。何故に云ふや、有と取とは無なればなり。これ無くば、そは誰であり、何へ輪廻するや。

①、②、③ 般若燈論「若從取至取、則招無有過、無取亦無有、其誰當往來。」
 中觀釋論「能取及所取、無諸有往來、無有即無取、何有往來者。」

此に問て曰、

根本(所依)なければ、涅槃は得べからざるが故に、諸行と衆生とは涅槃すべし。此に釋して曰、

④「行は涅槃すとは、
 //hDu-Byed Mya-Nan-hDas-Bar-Ni/

如何にするもまた認むべからず、
 //ji-lta-Bar- Yan Mi-hThad-Do/

又衆生は涅槃すとは、
 //Sems-Can Mya-Nan-hDas-Bar Yan/

②云何にするもまた認むべからず」
 //ji-lta-Bar Yan hThad-Mi-hGyur//

「諸行若滅者、
 //Samskāraṇāni na nirvānaḥ

是事終不然、
 kathani cid upapadyate/

衆生若滅者、
 Sattvasya 'pi na nirvānaḥ

是事亦不然」
 kathani cid upapadyate// (p. 288)

/Dass die saṃskāras erlöschen, ist nicht irgendwie angängig.

Auch dass sattva erlischt, ist nicht, irgenwie angängig/ (p. 86)

汝は諸行と(samsara)衆生とは涅槃すべしと彼の凡ての説明に於て、又我は先きに諸行と衆生とは無自性の故に、一切の(五)種は輪廻するを認むべからずと説き盡くせしかば、輪廻は認むべからざるが故に、諸行と衆生との他の(五)種は何に由て涅槃を認むべきや。

① 中觀釋論「彼諸行無滅、此云何可有、衆生亦無滅、復云何可有。」

② 本文「如何にするも亦認むべし」
/Ti-La-Bar Yan h'Thad-par-h'Gyur/

此に問て曰、根本(所依)なしには繫縛と解脱とを思惟するに適せざるが故に、諸行と衆生との繫縛と解脱とは二者となるべし。此に釋して曰、

⑤「生滅の法を有する諸行は
//Skye h'jig Chosn-Can h'Du-Byed-Rnams/

① 縛せられず、解かれず、
/Mi-h'Chin Grol-bar Mi-h'Gyur-Te/

② 前の如く衆生も亦、
/Sha-ma-h'Shin-Du Sems-Can Yan/

縛せられず、解かれず」
/Mi-h'Chin Grol-bar Mi-h'Gyur-Ro/

「諸行生滅相、
//Na badhyante na mnyanta

不縛亦不解、
udaya-vyaya-dharminah/

衆生如先説、
Samskarah purvatat sattvo.

前の如く衆生は

不縛亦不解。」縛せられず、解かれず。」

bandhyate na na mucyate// (p. 290)

/Die mit Entsehen und Vergehen behafteten saṃskāras werden nicht gebunden (und) werden nicht erlöst.

Wie vorhin (sc. gezeigt wurde), wird sattva auch nicht gebunden (und) nicht erlöst./ (p. 87)

汝は諸行と衆生との繫縛と解脱とは、二者となるべしとの彼の凡ての説明に於て、應に諸行は繫縛と解脱とは認むべからず。何故に云ふや、生と滅との法を有してあるが故に。衆生もまた繫縛と解脱とを認むべからず。何の故に云ふや、前の如く諸の蘊と處と界との中に於て、五種を以て求むるに無なるが故に。

①、② 中觀釋論「無縛亦無解、縛、解若_レ有_レ作、即縛、解不生。」

此に問て曰、衆生は取と共なると、かの取と、他のものなりと云はることなく、縛せらるべし。

⑥「若し有は縛ならば、

//Gar-te Ñe-bar-I-en ĩChin-Na/

取と共なるものは縛せられず、

/Ñe-bar-I-en-bCas ĩChin-Ni-hGyur/

取なければ縛せられず、

/Ñe-bar-I-en-Med Mi-ĩChin-Sie/

何ものゝ位置に(於て)縛せらるべし」

/gNas-Skabs Ğai-Shig ĩChin-bar-ĩGyur//

「若身名爲縛」 「若し取が縛ならば」

//Bandhanani ced upādānani

有身則不縛 取と共なるものは縛せられず

sa-upādāno na badhyate/

無身亦不縛 取ならざるものは縛せられず

Badhyate na-anupādāni

於何而有縛」 如何にして状態が縛せらるゝや。」

kin avastho 'tha badhyate//

/Wenn upādāna gebunden ist, (dann) wird der mit upādāna Behaftete nicht gebunden.

Der von upādāna Freie ist nicht gebunden.—Welcher Zustand wird gebunden ?/ (p. 87)

若し取は縛せらるなりと思惟せば、斯くては取と共なるものは縛せられず。何の故に云ふや、取は二に墮するが故なり。取なきものも亦縛せられず、何の故に云ふや、取なく「有」なきものは(有)何によつても亦縛せられざるが故なり。この故に而かもば今第三位は誰を縛すべしと分別するや。

①、②、③ 般若燈論「若爲諸取縛、縛者無解脫、無取故無縛。」

中觀釋論「若因取名縛、有取即不縛、無取亦不縛。」

又復

⑦「若し縛せらるものゝ前に於て、

//Gar-Te bCinis-pahi Sna-Rol-Na/

①縛あらば縛に觸るべし、

/hChin-ba Yod-Na hChin-Ia-Rag/

② それも亦無なり、その餘は、

/De-Yan Med-De Ithag-Ma-Ni/

已去と未去と去時(品)によりて説かれたり。」

/Soñ Dañ Ma-Soñ bGom-pas bStan//

「若可縛先縛、
若し縛せらるゝものゝ前にそれ
があらば」

//Badhnyād bandhanani Kāmani/

則應縛可縛、
縛は恐らく縛するであらう、

bandhyāt pūrya ñ bhavet yadi/

而先實無縛、
而してそれはなし、その残りの
ものは

Na-cāsiti tat geṣam ukrañ (p. 101)

餘如去來答」
去時、已去、未去によりて已に
説かれたり」

śanyamāna-gata-agatāñ // (p. 102)

/Wenn vor dem Gebundenen Binden existiert, dann mag es binden ;

Es existiert aber nicht. Das übrige ist durch Gegangenes, (nach) nicht Gegangenes, (Gehen-
des) gelehrt/ (p. 88)

若し縛せらる存在の前に縛あらば、それに由てかの縛に觸るべし、何故とならば廣く分別するに、
かの縛もまた前に無し、この故に取は縛せらるゝを認むべからず、餘とは已去と未去と往(品)
によりて説かれたり。如何ぞ已去と未去と往とに於て現去と現去の初なきが如く、已縛と現縛等に
於て亦縛と縛の初なし。

①、② 中觀釋論「彼縛能縛身、今既無所縛。」

③ 本偈—bSgom-pa(Bhāvanā, 修習)は誤。 去時(bGom-pa, Geamyanāna, 往)

④ 現去 (hGro-ba, Gannam, 趣行、漢譯去、獨譯 Gehen.

此に問て曰、解は有るべし。此に釋して曰、

⑧「暫らく已縛に於て解せられず

//Re-Shig bCins-par Mi-hGroI-Te/

未縛もまた解せられず」

/Ma-bCins-pa Yañ hGroI Mi-hGyur/

①「縛者無有解、
縛せられたるものゝ解かれし
限りは

//Baddho na mucyate yāvad

②「不縛亦無解」
未だ縛せられざるものゝ解かれ
ず」

abaddho naiva mucyate/

/Der Gebundene wird eben nicht erlöst, der Nicht-gebundene auch wird nicht erlöst./ (p. 88)

暫らく已縛は解かれず、何の故に云ふや、已縛の故なり。未縛も亦解かれず、何の故に云ふや、現縛なきが故なり。そこに是を考ふるに、若し已縛は解せらるゝならば、それに由て過失は何になるべしと思惟するや。此に釋すべし。

「已縛が解かれしゝあるものならべし」

/bCins-pa hGroI-bShin Yin-Gyur-Na/

已縛と解とは一時なるべし」

/bCins Dan hGroI-ba Dus-gCig-hGyur//

④「縛時 有解者、
「已縛が解かれしゝあるものなら
べし」

/Syātāni banddhe mucyānāne

縛解則一時」 已縛と解脫とは一時なるべし」

Yugapad bandha-mokṣaṇe// (p. 283)

/Wenn der Gebundene erlöst würde, so wären der Gebundene und der Erlöste gleichzeitig/ (p. 88)

已縛が解せられつゝあるものならば、已縛と解とは一時たるが故に、そは謂ふべからず。已縛と解とは二にして不相應の故に、燈と闇との如し。

① ② ③ ④ 般若燈論「縛者則無脱、未縛者無脱、縛時_レ有_レ脱者、縛_レ解則一時。」

中觀釋論「已縛即不縛、未縛亦不縛、離_レ已縛、未縛、縛時亦不縛。」

⑤ ⑥ ⑦ ⑧ 本偈—Grol (pf of hGrol)

此に問て曰、解脱は有るべし、輪廻するが故に、諸の怖畏の中に於て時に我は取なければ般涅

槃（無餘）すべし。時に般涅槃は我に由て成るべしと（マタ）思惟してあるが故なり。此に釋して曰、

⑨「我れは取なければ涅槃すべし、

涅槃は我れに由て成るべしと、

あらゆる執する彼等の

取は能く盡されず」

「若不_レ受_レ諸法、」無取なる我は涅槃すべし

我當得_レ涅槃、 我に涅槃はあるべし

龍樹造・中論無畏疏

若人如是者、と云ふ執ある彼等に付て

Iti yeṣāmi grahas teṣāmi

説爲受所縛」 取の大執あり」

upādāna-mahāgrahaḥ// (p. 295)

„Ich werde ohne upādāna erfōssen“, „Das nirvāna wird meiner sein“;

Die (so) erfassen, die erfassen upādāna nicht gut./ (p. 88)

時に凡て我れに取なくば般涅槃すべしと。時に槃涅槃は我れに由て成せらるべしと思惟し執する彼等に、我と我所 (bDag Dan bDag-Gir) とを執する、かの取は能く盡くされずと知るべきなり。

① 般若燈論「我滅無諸取、我當得涅槃、受如_レ是執者、此執爲不善。」

中觀釋論「若我滅無取、我得涅槃者、此或有彼執、還成執於取。」

② 本偈譯「涅槃は我に(我)なるべしと、 /Aṅgā-ḥ-Das bDag-Gir iGyur-Ro Shec/

③ 「是の如くあらゆる執する彼の /De-Ikar Gañ-Dag ḥDsin De-Yi/

④ 取は大執なり。」 /Ñe-Ten qDsin-pa chen-po Yin/

⑤ 原文—bDag-Gir-ḥGyur-Shig-Gu (我所||我がもの—になるべしと)

⑥ 原文—Gu は ches (ity) と同義

此に問て曰、應に輪廻と涅槃とはあるべし。それらは唯あるもののみあれども、如何なるものも

また無に非ざるが故に、輪廻するものと涅槃するものとはまたあるべし。此に釋して曰、

⑩「何處にも涅槃は起るなし。」 //Gañ-ḥa Mya-Nan-ḥDāḥ bSKyed-Med/

① 輪廻は除くことあるなし、

/hKhor-Ba bSal-baḥam Yod-Min-pa/

そこに何ぞ輪廻あらんや、

/De-la hKhor-ba Ci-Shig Yin/

何ぞ涅槃を分別すべき」

/Aḡya-Nan hDas-paḥam Ci-Shig bRtag//

「不離於生死、」涅槃の建立なく、

/Na nirvāṇa-samāropo

而別有涅槃、

輪廻の捨離なし

na saṃsāra-apakarsaṇam/

實相義如是、

そこに如何なる輪廻があらんや
と云ふところに

Yatra kas tatra saṃsāro

云何有分別」

如何にして涅槃が分別せられん」

nirvāṇam kin vikalpyate// (p. 299)

/Wo nirvāṇa nicht entsteht, saṃsāra auch nicht entfernt wird,

Wie ist da saṃsāra? welches nirvāṇa wird unterschieden? (p. 89)

何處にても勝義 (paramārtha, 第一義諦) には涅槃の起ることなし。輪廻はまだ除くことあることなし。そこに輪廻は何ぞありと分別せられ、涅槃もまた何ぞありと分別せらるや。それ等は無なれば、輪廻するものと涅槃するものと亦あることなし、虚空の如し。

① 般若燈論「不應捨生死、不應立涅槃、生死及涅槃、無二無分別。」

中觀釋論「若我滅無取、我得涅槃者、此或有彼執、還成執於取。」

中觀釋論では第十六品は總十一偈なり。中論、般若では何れも十偈なり。

阿闍梨耶、聖龍樹によりて造られたる「根本中論無畏疏」内、「縛と解とを觀ずと名けられて第十六品なり」

(bCins-pa Dai Thar-ba bRtag-pa Shes-Bya-ba-Sre/ Rab-Tu-Ryed-pa bCu-Drug-paho)

「觀業品」第十七 (karma-phala-parikṣā)

此に問て曰、一切の存在(dānos-po)は空にあらず、業と果とは完全に施設せらるゝが故なり。
とは何を云ふや。

①「自を善く制し、

他を饒益す、かの慈心は、

是れ法なり、そは是れ他(世)に於ける。

諸果の種子なり。」

「人能降伏心、」

利益於衆生、

是名爲慈善、

二世果報種」

「自をよく制し

他を擁受し、同情である心は

それは法なり、それは後(世)と

此世との果の種子なり」

//bDag-Ñid Legs-par Sdom-pa Dai/

/gShan-la Phau-ñDogs Byams-sens Gai/

/De-Chos De-Ni hDi gShin-Du/

/ñBras-Bu-Dag-gi Sa-Bon-Yin//

//Ātmasañyamakanī cetah

para-anugrāhakanī ca yat/

Maitra ī sa dharmas tad bijanī

phalasya pretya ceha ca// (p. 303)

/Eine Gesinnung, welche sich selbst gut bezahlt und gegen andere wohlwollend und freundlich ist, Das ist dharma; das ist same von Früchten hier und jenseitig (eig. anderswo). / (p. 90)

「自を善く制す」とは、自を決定持するを示すことなり、「他を饒益す」とは、(p. 75a) 他を假托(假)せしむと云ふ義なり。「慈」とは慈を有して、諸衆生を饒益すといふ義なり。其等の心の總ては是れ法なり、實に持するを教へられ、そは此の世と、他(の世)に於ける諸果の種子なりと説かれたり。

① 般若燈論「自護身口思、及彼攝他者、慈法爲種子、能得現未來」
 中觀釋論「自能降伏心、復能攝受他、卽有慈愛心、此說降伏體。」

それとは何を云ふや。曰、

②「最勝仙に由て諸業は、

③ 思と思已なりと説かれたり、

かの諸業の差別は、

多種なりと廣く説き給へり。」

「大聖説二業、 大聖によりて業は

思與從思生、 思と思已なりと説かれたり

//Drani-Sroñ mChog-Gis Ias-Rnams-Ni/

/Sems-pa Dañ-Ni hSan-par gSuns/

/Ias De-Dag-Gi Bye-Brag-Ni/

/Rnam-pa Du-Mar Yoñ-Su-bSgrags//

//Cetanā cetayivā ca

karma-uktāñ parama-iṣṭinā/ (p. 305)

是業別相中、その多種なる差別は、

Tasya anekavidho bhedah

種々分別説」業に付て説かれたり」

karnanañ parikṛitāḥ // (p. 306)

/Durch den höchsten Weisen werden die Taten als Gedanke (citta) und Gedankenhaft (cetayivā) verkündet;

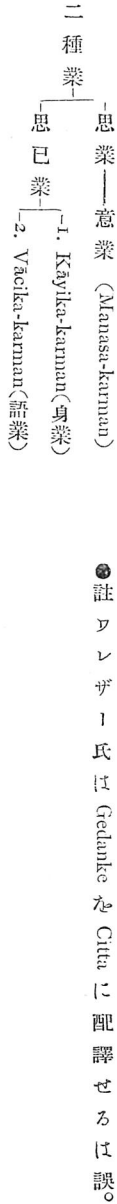
Der Unterschied dieser Taten wird auf viele Arten dargestellt. / (p. 90)

かの諸業の差別は廣く阿毘曇 (abhidharma, Cios-mN'on-pa) 中に説かるゝが故に、殘餘は明瞭の故に此には説かず。

① 般若燈論「大仙所説業、思及思所起、於是二業中、無量差別説。」

中觀釋論「思及思所生、大仙所説業、彼業有多種、次次而分別。」

② ③ 「大毘婆沙論」第十五卷の「業蘊品」、「俱舍論」第六卷の「業品」。



③「そこにかの業は思なりと云ふ」

//De-la Ras Gran Sems-pa Shes/

かの所説は意(業)なるを云ふ

/gSuis-pa De-ni Yid-Kyir hDod/

思已といふは何の所説ぞや、

/bSam-pa Shes-Ni Gan gSuns-pa/

そは身と語との(業)なり」

/De-Ni Lus Dai Nag-Gi Yin//

「佛所説思者、

「そこに思と説かれるその業は

//Tatra yac cetaneyi uktaim

所謂意業是、

それは意業と説かる

karma tan mānasain smṛitain/

所從(思生)者、

然し思已と説かれたるものと

Cetayivā ca yat tu-uktam

即是身口業」

身業と語(業)なりと説かる。」

tat tu kāyika-vācikaṁ // (p. 306)

/Dort wird die Tat, welche als Denken bezeichnet wird, als (eine Solche) des Geistes angen-

ommen (ig. gewünscht); Diejenige, welche als gedankenhaft (cetayivā) bezeichnet ist, (ist

eine solche) des Leibes und der Rede/ (p. 90)

① 般若燈論「如前所説思、但名意業、從思所起者、即是身口業。」

中觀釋論「彼所説思者、此即是意業、從思所生者、所謂身語業。」

② 本偈—/De-ni Lus Dai Nag-Gi Yin/ (それは身と語とに於けるを謂ふ)。

それ等を詳釋することは是れなり。そはまた略せば如何なる相を云ふや、曰。

④「語と動と非難の、

//Nag Dai bSkyrod Dan Mi-Spoñ-Bahi/

かの無表と名けらるゝものと、

/Rnam-Rig-Byed-Min Shes-Bya Gan/

離の無表と、

/Spoñ-buñi Rnam-Rig-Byed Min-pa/

又諸他(のもの)も是の如しと謂ふ。」

/gShan-Dag Kyah-Ni De-bShin-ñDod//

「身業及口意業、語と動と而して

//Yag-vispando 'viratayo

作與無作業、

無表と名けらる非離と

Yagca-avijñapti-samjñitah/

如是四事中、

而も又他の無表なる離と

Avijñāptaya eva-anyañ

亦善亦不善、

是の如きものが謂はる。」

smñitā viratayas tathā// (p. 307)

/Rede (vātk), Bewegung (vispanda), auch die als Nichtusserungen (avijñapti, eig. „nicht-

erkennen-lassen“) bezeichneten Unruhen (avirati), (p. 90)

Auch die anderen Nichtusserungen von Ruhe (virati) werden so angenommen./ (p. 91)

① 般若燈論「身業及口業、作與無作四、語起遠離等、皆有善不善、」

中觀釋論「受用故生福、施受用福生、非福亦復然、此名受用義。」

② 本文—Rnam-Rig-Byed-Min(無表認識せしむることなし)作識なし(無作識)無了別作の義。

③ 本文 bSktyod(動)は梵語 nispanḍa の對譯である。P. サン 氏脚註に vispanda, nispanḍa, nispanḍa—bSktyod = prakam, ksabh, cal, ākamp, sambhram, tras, ㄨㄉㄣ (poussin's, p. 307)

④ 梵文—A+viñapti(無表) = A+viñ+pti. Viññā = Rnam-Rig(西藏譯識)別 pty = Byed(西藏譯作)作(しむ)。

⑤ 梵文 smñitā(記憶)は西藏譯本文 ḍod-pa 欲する、欲愛するの對譯にして「謂はる」「稱せらる」

と譯すべきである。

⑤「受用より生ずる功德と、

かの理趣の如く非功德と、

思と、かの七法は、

業を現かに謂ふことなり。」

「從用生_二福德_一

「受用より生ずる功德と

罪生亦如是、

同種の非徳行と

及思爲_二七法_一

② 思と是等の七法は

能了_二諸業相_一

③ 業の眼驗藥と稱せらるる」

/Das aus (Frenuss (paribhoga) hervorgerungene Reine, das ebensolche Urreine, und Denken

(cetanā).

Disse sieben dh armas werden als die Tat offenbarend (vyañjana) angenommen/ (p. 91)

「語」とらふは四種の口業なり。「動」(Nispanda, bSkvod) とらふは、身の動 (gYo-ba) は三種なり。

「かの非離の無表」といへる總てのものは、不善を如實に取ること以來より、他の非離を生ずる身

と口(業)との總てのものなり。「無表」といふは、「動」なきものといはるゝ義なり。「他の離の無表」(p.75b)も亦是の如しと謂ふ」とは、善を如實に取ること以來より、離の他のもの(無表)を生ずる身と口(業)との總てのものにして、非離と同じと説かれたり。

「受用より生ずる功德」と云ふは、廣く受用の因より生ずると云へる義なり。「かの理趣の如く非功德と思」といふは、廣く受用の因より生ずると云へる義なり。「思」と云ふは、現行 (abhisamskāra, m'Non-par h'Du-Byed-pa) と云へる義なり。「かの七法は業を現かに謂ふことなり」といふは、略せばそれ等の七法は業を現かに作さしむることを説けるなり、「業を現かに作さしむる」とは、それ等の業なることを現かにし、明瞭にし、了解し、説明せしむることなり。是の如く何の故に此の如き業の果は此(世)と他(世)とに生ずるかを説けり、それ故に業と果とは安立せられて一切存在は空に非ざるなり。

① 般若燈論「受用自體福、罪生亦如是 及思爲七業、能了諸業相。」

中觀釋論「并思爲七種、了知諸業法、身語表、無表、遠離不遠離。」

梵語 pari-hogā (完全に受用する)は西藏語 Tons-Spyod-kyi Sku 受用の身)と同一の語原である。中論の「受用」なる意味は三寶中の僧寶に對して施せる種々の供物を受用するとの意であるが、此 pari+hogā と sari bhogā とは共通の意義に使用されてゐる。龍樹に法・報・應三身思想の存在したといふ、西藏史家併龍樹の三身讚と三身讚疏の原典の存在するに照應して注意すべき思想であらう。(拙譯「佛教研究誌」參照)

② 獨譯—思 (Denken, ce'ana)

③ 獨譯—行爲を表はす (Tat offenharend)

此に釋して曰、

⑥「若し熱の時にまで、

住するにより、かの業は常となるべし。

若し滅すれば滅したるものが、

如何ぞ果を生せんや」

「業住至受報」 「若し熱する時より住するならば

是業即爲常、 その業は常となるべし

若滅即無業、 若し滅せば滅したるものが

云何生果報」 如何なる果を生ぜん」

/Wenn es bis zur Zeit der Reife dauerte, so wär dieses karma ewig.

Wenn es vergangen wäre, wie würde als Vergangenes es Frucht hervorbringen ?/ (p. 91)

此に業は住するも若は滅するも果を生ずべし (Phalan-janayisyati, hBras-Bu hSkyed-par-hGyur) ㄨ

/, Gar-Te Smin-Pahi Dus-par-Na/

/gNas-Nas Ias-De Rtag-par-hGyur/

/Gar-Te hGag-Na hGag-Gyur-pa/

/Ji-I-tar hBras-Bu bSkyed-par-hGyur//

//Tishtaty äyaka-kälac cet

karma tan nityatam iyät/

Niruddhahi cen niruddhahi

sat kim phalan janayisyati// (p. 311)

計慮するとも、二者の見はまた認むべからず。何の故に云ふや。應に若し熟(報)の時に至るまで住せば、斯くては常となるが故に、それは謂ふべからず。若し滅すと思惟せば、滅したるものは無なるが故に、如何ぞ果を生せんや。

此に問て曰、

⑦「芽等^①の總ての相續は、

種子より現かに生ず、

それより果(を生じ)、種子は、

無くばそは又生せず」

「如^②芽等相續」 芽等の相續は

皆從^③種子生、 種子より現行し

從^④是而生果、 それより果(を生じ)その相續は

離^⑤種無^⑥相續」 種子を離れて現行せず」

/Die Reihe (santāna) von Spross usw., welche aus dem Samen hervorgeht (abhipravartate),

Entsteht nicht daraus ohne den Samen / (p. 92)

// Myu-Gu-la-Sogs Rgyun Gan-Ni/

/Sa-Bon Las-Ni mNon-par-ñByuni/

De-Ias ñBras-Bu Sa-Bon-Ni/

/Med-Na De Yai ñByuni-Mi-ñGyur//

//Yo 'ikura-prahñtir bijāt

santāno 'ñhipravartate/

Tatañ phalam ñite bijāt

sa ca na-abhipravartate// (p. 312)

① 中觀釋論——若芽等相續、芽等復生餘、種先而果後、不斷亦不常。」

本論第一章(25)穀物の種子と芽との譬に付て斷常なし去來なしを説けり。又此の種子説は後代の唯識思想に於て阿頼耶識の「種子生現行現行生種子」の意味と照應す、參照。
② 種子より現行す—梵語 *Bijā-abhinivartate*, 西藏語 *Sa-Bon-las m'ñon-par ḥbyun* 仁の對譯なり。

(8) ①「何故とならば種子より相續を、

相續より果を生ずべし、

種子は果の先行なり、

この故に非斷、非常なり。

「從「種有相續」 「種子より相續あり

從「相續有果、 相續より果を生ず

先種後有果、 種子は先にして果は次にあり

不斷亦不常」 それ故に斷なく、常なく」

/Indem aus dem Samen die Reihe und aus der Reihe der Samen hervorgeht.

Geht der Samen der Frucht vorher; deshalb ist Vernichtung, nicht Ewig (keit). / (p. 92)

此に種子は芽の相續を生じて滅し、芽等のかの總ての相續は種子より現かに生じ、かの相續より果

を現かに生ず。種子なくば芽等のかの相續は、また現かに生ぜざるべし。何の故となれば、種子より相續は現かに生じ、相續より果は現かに生じ、種子は果の先行なり、此の故に斷と常とは非ず。何故とならば、種子は一切の種類を斷じて相續は生ずるに非ずといへども、相續の隨轉あり、此の故に斷に非ず。何故とならば、種子は滅して決定して住せず、この故にまた常にも非ず。

① 中觀釋論「若不先植種、果生即不能、因隨果法中、從芽等相續。」

それ如何なるも是の如く、

⑨「心の相續は何であらうとも、

思より現かに生ず、

それより果(を生じ)思は、

無くばそれは又生ぜざるべし。」

「如是從初心」 「それ故に心の相續は

心法相續生、 思より現行す

從是而有果、 その相續より果あると云ふ

離心無相續」 その相續は心を離れて現行せず」

/Sems-kyi Rgyu-Ni Grñ-Yin-Ra/

/Sems--pa-l-as-Ni mñon-par-ñByuñ/

/De-l-as ñBras-Bu Sems-pa-Ni/

/Med-Na De-Yañ ñByuñ-Mi-ñGyur//

//Yas tasmāc citta sañtānaç

oçtaso ñhipravartate/

Tatañ phalam ñti citāt

sa ca na-abhipravartate// (p. 313)

/Was Gedankenzusammenhang (citta-santāna) ist, das geht aus Danken hervor.

Daher entsteht die Frucht auch nicht ohne Gedanken/ (p. 92)

① 般若燈論第二句「心法相續起」第四句「離心無相續。」

中觀釋論第二、第三、四句「心法即現轉」果若離於心「無相續可轉。」

中論本偈譯——

「心の相續は何でもあらうとぞ、

//Sems-kyi Rgyun-Ni Gan-Yin-pa/

心より現かに生ずべし、

/Sems-Las mNon-par hByun-Bar-hGyur/

それより果(を生ずべし)心を見よ、

/De-Las hBras-Bu Sems Lta-Shig/

無くばそれは生ずべし、

/Me-Na De-Yan hByun-Mi-hGyur//

原文—思(Sems-pa)は本偈譯には心(sems)とあり。

② 余が將來の北京版即ち本書原文の第三句にはSems-pa(思)とあり、Sems(心)或はSems-dPa(衆生)とはない、但し徳格版にはSems-pa(思)とあるのは本書と一致する。然し今此處は梵文、漢譯三種共に皆「心を離る」とあるに據りて、藏文の「思は無くば」を「心は無くば」と改訂せねばならないであらう。従つて又原文Sems-pa-Ni(思は)をSems-dan-Ni(心は)と改訂すれば梵漢に相應すべきも、今は原文の儘にして譯出した。

獨譯第三第四句「それより果は現る、又心なしには相續は現行せず」とあり。

(10) 「何故とならば心より相續あり、」

//Gan-Phyir Sems-Las Rgyun Dan-Ni/

相續より果を生ずべし、

/Ryūn-Las ħBras-Bu ħByun-ħGyur-shin/

業は果に先行す、

/Las-Ni ħBras-Bu Shon-ħGro-ba/

それ故に斷に非ず、常に非ず」

/De-Phyir Chad-Min Raag-Ma-Yin/

「從」心有相續」 「心より相續あり

//Cittāc ca yasmāt sauitānaḥ

從「相續」有果、 相續より果を發生す

Sauiānāc ca phala-udbhavaḥ/

先業後有果、 業は先きに果は次にあり

Karma-pūrvān phalān tasmān

不斷亦不斷。」 それ故に斷なく、常なく」

na-ucchinān nāpi gācyatān// (p. 314)

/Weil aus dem Gedanken die Reihe, aus der Reihe die Frucht hervorgeht,

Geht die Tat (karma) der Frucht vorher; deshalb ist nicht Vernichtung (uccheda), nicht

Ewigkeit/ (p. 92)

心の相續は何であらうとも心^② (sens) より(生ずるに於て)と稱せらるゝ總ては、かの滅しつゝある

より現かに生じ、かの相續より果は現かに生ずるなり。若し心^③ になくばかの心の相續は現かに生ぜざ

るべし。何故とならば心より(生ずるに於て)と稱せらるものより心の相續は現かに生ずるか故に、

心の相續より果は現かに生じ、業は果の先行なり、それ故に斷と常とは非ず。何故とならば心^④は

滅しつゝあるものより心の相續は生ずれども、一切の心相を滅せず、それ故に斷に非ず。何故とな

らば(心)⑥心を滅して決定して住せず、それ故にまた常にも非ず。この故に是の如く相續の果を成ずるが故に、輪廻もまた認められ、常と斷との過失もまた認むべからず。

① 漢譯三種共に「心」とあり。本僞譯には「心(sens)」とあり、今之に據りて本文思(Sems-pa)を「心」に改訂せり。氏の本文の藏譯は左の如く思(Sems-pa)とあり。

「何故とならば思より相續は(生ず)」
//Gai-phyir Sems-pa-Las Rgyud Dan/

相續より果は生じつゝ、
/Rgyun-Lus hBas-Bu hByun-hGyur-Shii/

業は果に先行す、
/Las-Ni hBas-Bu Shon-hGro-Bu/

それゆゑに斷に非ず、常に非ず。」
/De-phyir Chad-Min Rtag-Ma-Yin/

② 原文 Sems-pa-Las-Su bRjod-pa(思より(生ずる)に於てと稱せらるゝもの)は梵文漢譯三種等によりて Sems-Las-Su bRjod-pa(心より(生ずる)に於てと稱せらるもの)と改訂した。

獨譯—Was Gedanken-Tat(citta karma) genant wird(?) (心業と各けらるものは何か)とあり、然しこれ(心より)(Sems-Las)とある原文の從格的「より」(Las)といふ字を Wallaser 氏は業(Las)と同原字なるより誤つて「業」の意なりと解せしに由ら Gedanken-Tat(citta-karma)と誤解したのである。此の僞文の第一句に照應すれば「心より」と譯することが妥當であらう。

③ 原文 Sems-dPal-Med-Na(衆生なくば)は Sems-Med-Na(心なくば)と改訂すべきである。獨譯も Wacen(sattva)として「衆生」の意に解せることは改むべきである。何故に心(Sems)とあるべきところ「衆生」(Sems-dPal)として誤寫したかと云へば、(原文)⑨⑩兩僞にも誤譯又は誤寫である如く、心(Sems)を思(Sems-pa, cetanā)なりと誤想せしに由りて遂に Sems-dPal(sattva, 衆生)の

誤寫を生ずるに至つたものであらう。或は本原典に *sutra* とあつたものかも知れない。今は心 (*sems, citta*) の意に譯出した。

④ は ③ と同誤。

⑤ ⑥ は ② と同誤。

此の法を成就する諸の方便とは何ぞや。果とは何をいふや。曰。

(11) ① 「法を成就する諸方便は、

白業の十道にして

法の果は、此(世)と他(世)とに於て

五欲の諸功德なり」

「能成福徳者、

是十白業道 正法の成就の方便なり

二世五欲樂 後世と此世とに於て法の果は

即是白業報」 五欲の功德なり。」

/Die Mittel zur Erlangung des dharmas sind die zehn hellen Tat-Wege (karma-patha).

Des dharmas Frucht hier und anderswo sind die fünf Arten von Wunschtugenden (kāma-

//Chos-bSgrub-pa-Yi Thabs-Rnams-Ni/

/dKar-Pohi Las-kyi Lam-bCu-Sre/

/Chos-kyi bBras-Bu hDi-gShan-Du/

/hDod-Pahi Yon-Tan Rnams-I'iah'o//

//Dharmasya sādhanā-upāyāḥ

guklāḥ karma-pathā daḡa/

Phalaḥ kāmāgūṇāḥ paṇ ca

dharmasya pretya ceḡa ca // (p. 314)

此に世尊は法成就の方便は十善業の諸道なりと教へ、その果はまた此(世)と他(世)とに於ける五欲の徳なりと教へ給ひて、かの偈は是れのみにて詳釋すれば足れり、煩に墮することは不合理なるが故なり。是の如く何故とならば、法成就の方便と法の果とを教けり、この故に業と果とに結合することも亦有り、また常と斷とに墮せざるべし。

① 般若燈論―「求法方便者、謂十白業道、勝欲樂五種、現未二世得。」
中觀釋論―「求法方便者、是十白業道、此世及他世、得五欲勝果。」
本偽譯―「白業の十道は

法成就の方便にして

法の果は此(世)と他(世)とに於て

五欲の諸功德なり」

/Chos-Sgrub-ba-Yi Thabs Yin-Te/

/Chos-kyi hBras-Bu hDi-gShan-Du/

/hDod-pahi Yon-Tan Rnams-Tshahi/

他の人々は言へり、

(12) ①「若し分別がそこに成るならば、

大なる罪は多くなるべし、

かるが故にその分別は、

//Gar-Te Rtag-pa Der-Gyur-Na/

/Nes-pa Che-po Mai-por-hGyur/

/De-lta-Bas-Na bRtag-pa De/

此には認むべからず。」

/hDir-Ni ĩThad-pa Ma Yin-No/

「若如汝分別」 「若し此の分別あらば、

//Bahavaç ca mahāntaç ca

其過則其多、 多くの而して大なる過あるべし、

doṣaṅ syur api kalpanā/

是故汝所説、 それ故に此の分別は、

Yody eṣā tena naiva-eṣā

於義則不然。」 有りえず。」

kalpanā-atra-upapadyate/ (p. 316)

/Wenn diese Annahme (kalpanā) (gemacht) würde, so wären viele grosse Fehler;

Daher trifft diese Annahme hier nicht zu/ (p. 93)

若し汝の業と果とに於て結合を成す。譬は種子と芽との相續結合を教示する分別は是の如くならばそこに多大の罪過を生ずるが故に、その分別は此には認むべからず。かの論證に由て此に業と果とに於ける結合は認むべからず。煩を除くが爲めに廣説せず。

① 中觀釋論「若如所説、次第而分別、彼有過失生、其過多復大。」

② 本偈譯「若し分別がそこに成るならば」/Geal-te hRtag-Der hGyur-Na/

さらば如何なる如くに認むべきやと問はゞ。曰、

(13)「諸佛と獨覺と、

//Sais-Rgya-Rnams Dan Nar-Rgyal Dan/

諸聲聞とが説き給へる、

/Nan-Thos-Rnams-kyis gSuns-pa-yi/

分別の何ものも此に認め、

/Rtag-pa Gan-Shig hDir hThas-pa/

其れを善く稱歎すべし。』

/De-Ni Rab-Tu bRjod-par-Bya//

「今當復更説、」諸佛、獨覺、

//Imāin punaḥ pravakṣyāmi

順業果報義、

聲聞により讚歎せられたる、

kalpanāḥ yātra yojyate/

諸佛辟支佛、

そこに妥當なる是等の分別な、

Buddhāḥ pratyekabuddhaḥ ca

賢聖所稱歎」

我は更に説くべし。』

grāvakaḥca anuvarṇitāḥ// (p. 317)

/Die Annahme (kalpanā), welche von Buddhas, Pratyekabuddhas, Śrāvaks verkündet ist,

Welche hier zutrifft, diese ist darzulegen/ (p. 93)

① 般若燈論「諸佛及緣覺、聲聞等所説、一切諸聖衆、所共分別者。」

中觀釋論「今我復説此、順正理分別、諸佛及緣覺、聲聞等讚説。」

② 本偈「諸聲聞が總て説き給くる」

/Nan-Thos Rnam-kyis Gan gSuns-Baḥi/

そは亦何を云ふやと問はる、

(14)「恰も負債と券との如く、

① //ji-lta-Bu Lon dBan-Rgya-ltar/

是の如く業と不失との如し。】(p.172a)

/De-Ltar Las Dan Chunn-Mi-Za/

「不失法如券、」券が不失の如くに

//Patrañi yathā 'viprañāṣas

業如負財物」 是の如く業は負債なり。」

tathā-yinam iya karma ca/

/Wie Schulden und (Schuld-) Schein, so sind Tat (karma) und Unverlierbares (aviprañāṣa)./

恰も是の如き負債は業を見るが(如くに)、恰も是の如き券は不失(法)を見るべし。譬は負債はかの財を消費するとも商券は存するが故に、財主の財は失はれず、財の畜積(元金)は利子 (bSkyaed) と共に來るべし。是の如く一刹那の業は滅盡するも、尙かの因より生ずる不失と名けらるゝ法あるが故に作者の業果は失はれず、殊勝の果と共に來るべし。恰も財主が財を返戻さるゝとき、負債の券は失はるべし、是の如く作者が果を受嘗するとき、不失(法)もまた是の如くなるべし。

① 本偈、「恰もかの券の如き不失と」

/dBañ-Rgya Ji-Ltar De-bShin Chud/

業は負債の如し」

/Mi-Za Las-Ni Ba-Lon-bShin/

(14) 「これは界によれば四種あり」

/De-Ni khams-las Rnam-pa-Shi/

この不失は欲と色と無色とに關係すると、無漏界との差別によれば四種となるべし。】

(14) 「それは亦本性は無記なり」

/De-Yan Ran-bShin Luni-Ma-bStan/

「此性則無記、」かの界は四種なり

/Caturvidho dhātutah sa

分別有「四種」 本性よりほくはかの無記なり sa prakṛitya 'vyākṛitaḥ ca-sah//

/Das ist den Elementen nach (dhātutaḥ) vierfach. Von Natur aus ist es auch nicht aufgezehnet (gleich-gültig, Avyākṛta). (p. 94)

かの不失法は亦本性 (prakṛiti, Rañ-bShin) に由て善と不善とを甄別せざるが故に無記なり。是等の失を廣く離れんが爲めに本性は無記なりと定めらる。是等の業もまた阿毘曇 (Chos-mñNon-pa) 中に於て知らるゝが故に、煩を離れんが爲めに説明せず。

(15) (見道)所斷によりて斷せらるゝに非ず //Spoi-bas Spani-ba Ma-Yin-Te/
また修習によりての所斷なり //bSgom-pas Spañ-Bya-Ñid Kyari-Yin/

「見諦所不斷」 「斷により斷せらるゝに非ず //Prahanato na prahayo

但思惟所斷」 修習により斷せらるゝなり。 bhāvanī-heya eva vā/ (p. 319)

Duch Aufgehen (prahāna) ist es nicht aufzugeben, durch Ausüben (bhāvanā) ist es (auch) aufzugeben/ (p. 94)

此の不失(法)に於て苦等を見るが故に、斷せらるゝものは(見道)所斷に由て斷せられず。果は顯現するとき、修道に由て斷せられ、果生せば亦斷せらるなり。」

(15) 「この故に不失(法)によりて、

業の果は生ずべし」。

/De-Phyir Chud Mi-Za-Ba-Yis/

/I-as-kyi ħBras-Bu BSkye-par-ħGyur/

以是不失法、

修習によりて断せらるるべきものな

/Tasmād avipranāgena

諸業有果報」 諸業の果は生ずべし。」

jāyate karmaṇāṁ phadam/ (p. 320)

/Deshalb wird durch das Unverlierbare die Frucht (phala) der Tat (karma) erzeugt./ (p. 95)

是の如く何故とならば、是の如く苦等を見れば、所断は(見道)所断に由て断せられず。それ故に苦等を見れば、所断の業は不善業の如く(また)業を断滅するも、尚不失法に由て諸業の果は生ずるに至るべし。

① 般若燈論「不爲見断、而是修道断、以是不失法、諸法有果報。」

中觀釋論「見道所不断、至修道乃断、是故不失法、能持於業果。」

② 本文 ħPho-ha(變見)は ħPho-ha (顯現)の誤寫なるか。

(16) 「若し(見道の)所断によりて断せられ、

//Gal-Te Spon-has Span-Ba Dai/

業の顯現と相應するならば

/I-as ħPro-Ba Dai mThun-Gyur-Na/

そこに業 滅 等の

/De-la I-as ħfig-la-Sogs-pahi/

諸の過失に墮すべし」

/Skyon-Rnams-Su-Ni Thal-bar-h'gyur//

「若見諦所斷、見道によりて斷せらるべし、

//Prahāṇataḥ praheyaḥ syāt

而業至相故、若は業の顯現により斷せらるならば

karmaṇaḥ saṅkrameṇa vā/

則得破業等、そこに業滅等の

Yadi doṣāḥ prasajyerams

如是之過咎」過失を伴ふべし」

tatra karma-vadhādayaḥ// (p. 320)

/Wennes (d. h. avipranāka) durch Aufgeben aufgegeben wird und mit wanderndem karma gleich wird, irden dann zutreffen I/ (p. 95)

此に若しかの不失法は苦等を免れば、所斷のものは(見道)の所斷によりて斷せられ、業滅して顯現^②し、衆向分とならば、そこに業果なきが故に、業滅等の諸過失に墮するが故に、そは謂ふべからず。是等も亦廣く阿毘曇の中に詳釋せらるゝが故に、此には説明せず。

① 本偈「業の變易によつて滅するならば」 /Las hPhos-pa-Yis hJig-hGyur-Na/

② 本文 hPho-ha (變易)は hPhro-ha (顯現)の誤寫、

復又

(17)「同界の業は相似と、

//khams mTshuṅs Las-Ni Cham-Tshuṅs Dan/

不相似との一切の

/Cha-Mi-nTshuus-pa Thams-Cad-kyi/

(業)其者の結合する時

/De-Ni-Nid mTshuus Sbyor-bahi-Tshe/

唯獨りのみ生すべし」

/gCig-Bu kho-Na Skye-bar-hGyur//

「一切諸行業、」同界の一切の、

//Sarvaśāmi viśabhāgānāni

相似不相似、 相似、不相似なる、

sabhāgānāni ca karmaṇāni/

一界初受身、 業の結合に於て

Pratisandhan sadhātūnām

爾時報獨生」 かの一が生ず」

eka utpadyate tu sah// (p. 321)

/Wenn die Taten (karma) von gleichem Element (dhātu), die gleichartigen (eig. gleichzeitigen, sabhāga) und die ungleichartigen (eig. ungleichzeitigen, visabhāga),

Sich verbinden (pratisandhan), dann entsteht eben eines./ (p. 95)

欲と色と無色と無漏界等より界相應の善業、若は不善業、若は無記、若は無漏の相似と不相似との、

この一切の不失法の時に於て各々の業より生ず、そは結合(再生)する時、唯獨りのみ生すべし。

① 般若燈論「現在未終時、一業一法起。中觀釋論」諸界一法生、一業一法起」